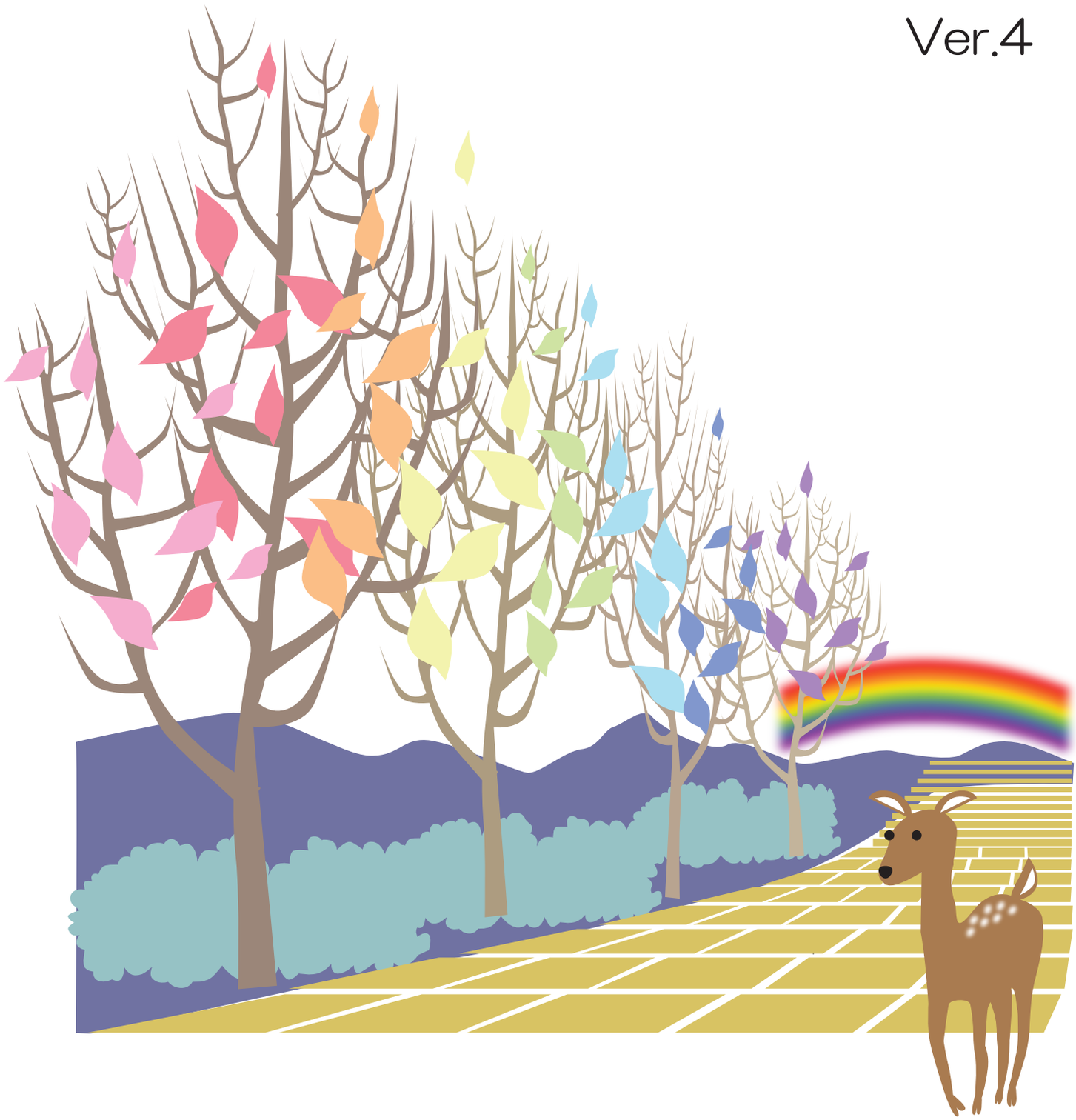
教職員のための
セクシュアルマイノリティサポートブック
Ver.4



性別・性自認・性的指向・性別表現等にかかわらず、すべての子どもにとって、安心・安全で居心地の良い学校に

現在、多様な性のありようやセクシュアルマイノリティの存在が、徐々に認識されつつあります。
セクシュアルマイノリティ、ＬＧＢＴ、ＬＧＢＴＱ、ＬＧＢＴｓ、Ｘジェンダー・・・。
言葉の多様化はそのまま性の多様性を表しているといえるでしょう。その背景には、「わかりやすい言葉の中に自分はいない」「今ある言葉では自分を表現できない」と感じる人たちの存在があります。「マイノリティの中のマイノリティ」も含め、なるべく誰かがいないことにならないよう、わかりやすさよりも、真の多様性が尊重されることを願います。

大切なことは、自分基準の思いやりや優しさ、理解ではなく、他者への敬意です。相手が何者であれ、たとえ理解できなくても目の前にあるちがいを尊重する、そのつきあいかたを学ぶことではないでしょうか。

誰かに対する人権侵害を見過ごさない、目の前のひとりを大切にする姿勢と、社会を生き抜く力を育てていきたいものです。

子どもたちの年代は、当事者も含め認識は不十分です。情報がなければなおのことです。当事者がそこにいるかもしれないという視点で、何者かにかかわらずその子の生きづらさに寄り添っていただければと思います。

「制服を着たくない」「制服を（異性のものに）変更したい」「同性が好き」など、学校の中で見える子どもの訴えは、あくまでも氷山の一角です。言えないでいる子どもたち、苦悩の中で孤立している子どもたちがたくさんいるはずです。ひとりひとりのケースに、丁寧に対応していくと同時に、マイノリティの生きづらさから学校や社会の課題を認識し、根本的に解決していく視点も必要ではないでしょうか。

性別に違和感を持ちからだの性別に合わせて生活することに苦痛を感じている子、同性を好きだと気づいてとまどう子、自分の性別がわからないと感じる子、いじめられている子、学校に行けなくなってしまった子、周囲の無意識の心ない言葉に傷ついている子。そしてその思いを抱えて大人になった人たち…。
この冊子には、名前や顔を出すことができないマイノリティ当事者の、たくさんの“声なき声”や思い、経験がつまっています。

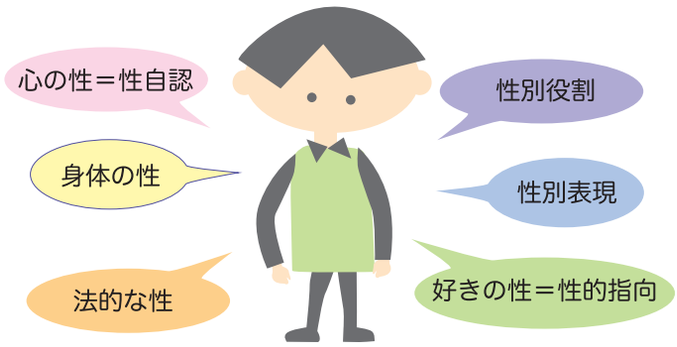
どのように生まれてくるかは選べなくても、どのように生きるかを決めるのはその人自身です。
私たちは、性別・性自認・性的指向・性別表現にかかわらず、すべての子どもたちの教育機会と、情報を知る権利、自分らしい表現、それぞれの自己決定が保障され、尊厳が守られることを願っています。
未来を担う子どもたちが多様な性のありようをうけとめ、希望を持って自分らしく学校生活を送ることができるよう、そして、マイノリティの子どもたちにとって、学校が安心･安全で居心地の良い場所となるよう、この冊子を活用していただければ幸いです。

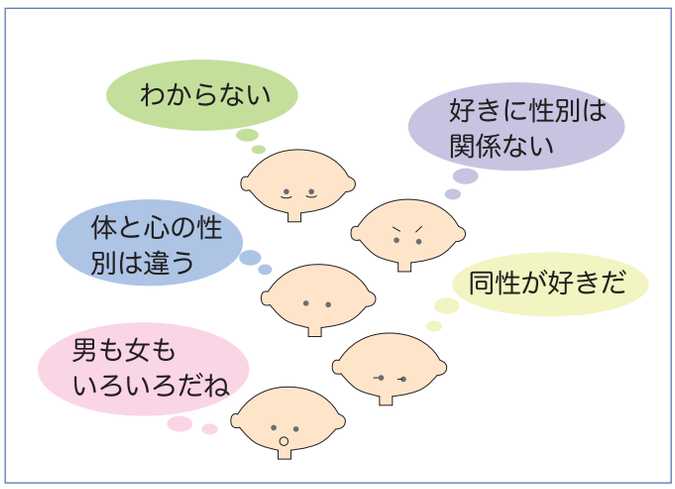
2018 年　　1 月

教職員のためのセクシュアルマイノリティサポートブック制作実行委員　一同

性をどう考えるか

性の要素はいろいろある





性の要素をどのように考えるかについては、分野によってさまざまで必ずしも統一されていません。
授業などで取り扱う際には、「いくつあります」と教えるのではなく、性別について考えてみる機会、多様性な性を知る機会と捉えましょう。

① 身体の性：生まれながらの身体の性（sex）。外性器、内性器、性腺、X・Y染色体や第二次性徴による外形的な特徴によって判断される。
② 心の性（性自認：gender identity）：自分の性別をどのように認識するかを意味する。
③ 性的指向（sexual orientation）：恋愛感情や性的関心の対象。例えば、同性、異性、両性など。
④ 性別役割（gender role）：社会や文化的・時代的に求められる「男らしさ」「女らしさ」など。
⑤ 性別表現（gender expression）：服装、言動などで表現される性別らしさ。
⑥ 法的な性別：戸籍や住民登録など、法律上の制度によって、登録された性別。　　など

さて、みなさんは、これらの性別について、どう認識しているでしょうか？　多くの人は単純に「男か女のどちらか」だと考えているかもしれません。また身体と心と性別表現は一致していてあたり前だと思っているかもしれません。

実際には、身体の発達が他の人とは少し異なる男性や女性、身体の性に違和感がある人、出生時とは異なる性別で生きる人、異性を好きになるのと同じように同性を好きになる人、自己認識や性的対象について性別にこだわらない人、どちらでもないと感じる人も少なくありません。本来、性のありようは多層になっており、多様で生涯にわたって流動的なものです。

性についてどう認識し、どう考えるかということは、その人の生き方やライフスタイル・生活・人生に大きくかかわる大切な要素のひとつです。人間関係を、誰と、どのように築いていくかということにも大きく影響します。一人ひとりの性のありようが大切にされ、誰もが自分に尊厳を持って、自分らしく生きていくことは、人としての当然の権利でもあります。

子どもたちにとって学校は、生活の大部分を占め、成長過程の大切な時期を過ごす場所です。子どもたち一人ひとりが、自分や他者の多様な性のありようを肯定的に受けとめ、お互いを尊重できるよう、援助していくことが大切でしょう。

◎ポイント
・自分の性のありようが、揺れている人、変わる人もいる。
・その人の気持ちを尊重する。
・見た目で分類したり、周囲が勝手に決めつけたりしないこと。
・周囲との「ちがい」を否定しないこと。

自分の性について考えてみよう

体の性	女	男
性自認	女	男
性別表現	女	男
性的指向	女	男

※　公開や書くことを強制しないこと

用語解説

◆セクシュアリティ（sexuality）

「性的」なことがらを指す言葉。文脈によって変わり、性のありようを指すこともある。

◆セクシュアルマイノリティ（Sexual minority）

性的少数者、性的少数派。性的指向、性自認、性別表現等において「典型」あるいは多数とは異なる性のありようをもつ人たちの総称。

◆身体の性にかかわる言葉

体の性の様々な発達（DSDs） Differences of Sex Development	染色体、性腺、子宮・膣の有無、外性器の形状など体の性の発達が、「女性ならばこういう体、男性ならばこういう体のはず」という固定概念とは生まれつき一部異なる状態。当事者の大多数はDSDを持たない人同様に、女性か男性と認識している。医学的には「性分化疾患（Disorders of Sex Development：DSD）」と呼ばれているが、近年では「Differences of Sex Development：体の性の様々な発達（DSDs）」とも呼ばれている。

◆性自認・性別表現にかかわる言葉

トランスジェンダー（TG） transgender	出生時に割り当てられた性別とは異なる性別を生きる人たちの総称。 性別越境者と訳される。
トランスセクシュアル (TS) transsexual	性別に違和感をもち、性別適合手術などによって身体を変えることを望む人。
性同一性障害（GID） Gender Identity Disorder	医学的な疾患名。身体的な性別に不快感、違和感などをもち、身体を変え、反対の性で生きることを強く望む。米精神医学会による診断基準 DSM-5（2013）では GID はなくなり、「gender-dysphoria：性別違和」に置き換えられた。診断基準も変更となり、国際的には脱疾患化の流れに向けた運動が盛んになっている。今後 WHO の疾病リスト改訂（ICD-11）が注目されている。
性別適合手術（SRS） Sex Reassignment Surgery	性器を望みの性別に近づける手術。以前は「性転換」と言われていたが、2002年日本精神神経学会が「性別適合手術」に統一した。
クロスドレッサー（CD） cross-dresser	異性装（異性の姿）をする人。 トランスヴェスタイト（transvestite：TV）という人もいる。
MtF Male to Female	男性として生まれ、性自認あるいは性別表現が女性の人（女性として生きる／生きたい人）。トランス女性（trans woman）という言葉も使われている。
FtM Female to Male	女性として生まれ、性自認あるいは性別表現が男性の人（男性として生きる／生きたい人）。トランス男性（trans man）という言葉も使われている。
FtX　／　MtX　X ジェンダー Female(Male) to X X gender	女性（男性）として生まれ、どちらでもない／どちらでもある性別として生きる／生きたい人。単に X ジェンダーと表現する人もいる。最近は、自身の性別が不定形であることを、中性・両性・無性・不定性等と表現する人たちもいる。
ジェンダーフルイド gender fluid	明確に男性でも女性でもない、男女両性の。あるいは単一の固定的な性自認をもたない人。性別が流動的なことをさす。

◆性的指向にかかわる言葉

同性愛者　homosexual （ホモセクシュアル）	性的指向が同性に向いている人。ゲイは男性同性愛者、レズビアン（ビアン）は女性同性愛者のこと。※海外では男女共に「ゲイ」と表現する場合もある。
異性愛者　heterosexual （ヘテロセクシュアル）	性的指向が異性に向いている人。
両性愛者　bisexual （バイセクシュアル）	性的指向が同性にも異性にも向いている人。または、性的・恋愛対象である相手の性別にこだわらない人、あるいは、優先順位が低い人。
ポリセクシュアル polysexual	典型的な男女でない人も含め、性的・恋愛対象が複数の性別・セクシュアリティに向いている人。多性愛と訳される。
パンセクシュアル pansexual	性的・恋愛対象である相手の性別・セクシュアリティにこだわらず、すべてのカテゴリーの人が対象である人。全性愛と訳される。オムニセクシュアルともいう。

◆いろいろ

クエスチョニング Questioning	特定の枠に属さない、わからない、典型的ではないと感じる人。 自分の性的指向や性自認がはっきりしていない人。何者かだと決めないことにしている人。
アセクシュアル　A sexual （Aｾｸｼｭｱﾙ、ｴｲｾｸｼｭｱﾙ）	性愛の対象を持たない人、または性的欲求そのものがない人。
クイア Queer	英語で差別的に使われる「変態」の意から当事者がポジティブに自称する言葉となったもの。LGBTQ を包括して使うこともある。
モノガミー monogamy	性的対象が単数の人、特定の一人の人とのつきあいを望む人。 または一夫一婦制。
ポリアモリー polyamory	性的対象が複数の人。 複数の婚姻関係の場合はポリガミーという。
LGBTIQ	Lesbian、Gay、Bisexual、Transgender、Intersex、Questioning または Queer（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー、インターセックス、クエスチョニングまたはクイア）の略称。LGBT と使われることも多いが多様性を尊重する意味もあり、LGBTQ、LGBT＋、LGBTs など、表現は多様化している。 ※インターセックス（DSDs）の「I」を LGBT に加える場合もあるが、大多数の当事者は自身をセクシュアルマイノリティの一員とは考えていない。
SOGI （ソジ・ソギ）	性的指向と性自認（Sexual Orientation and Gender Identity）。 国際的によく使われている略語表現。性別表現（Gender Expression）を加えて SOGI/E と使われることもある。

※　言葉は誰かを分類するために使わないこと。
　自分について、いつ誰にどのように表現・説明するかについては、その人の自己決定を尊重しましょう。

※　「ホモ」は男性同性愛者、「レズ」は女性同性愛者に対し、侮辱・差別的に使われることが多い言葉。
　また、「オカマ」「オトコオンナ」なども同様に、同性愛者やトランスジェンダー、あるいは「男・女らしくない人」などに対し、いじめ・　嘲笑・侮辱する際に、否定的に使われています。
　これらの言葉は、セクシュアルマイノリティ当事者が誇りを持って肯定的に、また自身をネタにする際使われる場合もありますが、第三者が使う場合は不快・差別的と受け取られることも多く、注意を要する言葉です。

※　言葉には歴史があります。なぜこの言葉が使われているのか／使われないのか、そこにはその時代を生きた当事者の思い、活動の歴史が込められていることがあります。

※　L／G／B／T に限定されない多様なありよう・表現があります。

これらはあくまでも編集時に整理したものです。情報は常に確認・更新しましょう。

補足 DSDs ／インターセックスについて

体の性の様々な発達（Differences of Sex Development：DSDs）とは？

染色体、性腺、子宮・膣の有無、外性器の形状など体の性の発達が、「女性ならばこういう体、男性ならばこういう体のはず」という固定概念とは生まれつき一部異なる状態です。
単一の体の状態ではなく、副腎形成異常やアンドロゲンレセプターに関わるもの、性ホルモンにかかわるものなど約 40 種類以上の様々な体の状態を包括する用語で、医学的には「性分化疾患（Disorders of Sex Development：DSD）」と呼ばれています。

ステレオタイプなイメージと実情

・DSDs は「体の発達の状態」を示す概念であって、性別やアイデンティティではありません。また、性別や性のありようの、男女以外のひとつのカテゴリーでもありません。

・いくつかの DSDs は、出生時に外性器の状態で判明します。「性別が分からない」「性別が判別できない」という捉え方もされていますが、大多数のケースでは、出生時の検査で、男性か女性か判明します。（勝手に性別を決められているわけではないのです）。医療では現在、わずかながら性別変更の可能性もあることが説明されています。

・DSD を持つ人の中には、初潮が起こらないこと、不妊であること等をきっかけとして、思春期以降に DSD が判明する人も少なくありません。（多くの人がまずその事実に衝撃を受けます）。

・判明時期にかかわらず、大多数の人は、自分を「男性」か「女性」と認識し、その性別で生きていて、自分をセクシュアルマイノリティであると考える人はあまり多くありません。DSDs＝「男でも女でもない性」「第三の性」「中間」「中性」「両性具有」「男女両方の特徴を持つ人」というステレオタイプの押しつけは、実状と違うだけでなく、当事者を大きく傷つけることがあります。

・日本では「インター“セックス”」という用語は、一般的に「性行為」を連想させるため、大多数の当事者家族には好まれておらず、DSDs を持ちかつセクシュアルマイノリティの人々の間でのみ使われています。

・DSD を持つ人でも、自分を「男でも女でもない」「中性」「性別がない」「インターセックスである」と自認／自称する人や、同性愛・両性愛・性別違和を持つ人もいます。その場合は他のセクシュアルマイノリティの人々同様、その人自身を尊重してください。

学校での対応〈ポイント〉

1、DSDs を含め性に関する体のあり方や容姿・「らしさ」と、性自認・性的指向はほとんど関係がありません。

2、DSDs を性別のカテゴリーのひとつ、あるいはグラデーションと捉えないこと。授業などで性の多様性について扱う際には、違いを否定しないと共に、「体の状態が人とちがうことは、女性（男性）であることを否定することではない」「女性の体、男性の体もいろいろ」「いろいろな男性、いろいろな女性がいる」ことも伝えましょう。

3、また、自分の子どもがいなくても、様々な家族の形態があり、必ずしも子どもがいなくてはいけないわけではないことを伝えておくと、ショックや悲嘆、不安の軽減につながります。

4、DSD を持つ子どもは特に思春期・青年期、周囲との違いを感じ傷つき孤立しやすくなります。ひとりではなく仲間がいることを伝えると共に、傷ついた自己イメージ、自己否定からの回復を支援していくことが大切です。（傷ついている当事者に、一方的・安易に「ありのまま」「多様でいい」といった発言は傷を深めることもあります。個別の状態や背景に配慮が必要でしょう。）

5、当事者である子ども同様、親もまた不安や衝撃、罪悪感を抱えている可能性に配慮が必要です。必要に応じ、医療や当事者・サポートグループとの連携を検討しましょう。

※参考サイト：ネクス DSD ジャパン（nexdsd JAPAN） http//www.nexdsd.com/

カミングアウトとアウティング

カミングアウト

もともとは、自分の性的指向を自分の意志で他の人に伝えること。現在では何らかの自分の秘密を伝えること全般を指す。

アウティング

他人の秘密を、本人の許可なく暴露すること。

カミングアウトを困難にしているもの

社会や本人自身の、セクシュアルマイノリティに対する否定的なイメージ、生き難さが、当事者のカミングアウトを困難にしています。多くの当事者は、カミングアウトすることで相手に拒絶されるのではないか、関係が壊れるのではないか、いじめの対象にならないか、などの不安を持っています。その結果、リスクを避けるために隠して生活することを選択する人が少なくありません。

カミングアウトは、自分の性のありようを受け入れ肯定する過程であり、自分らしく生きるための手段の一つです。もちろん、カミングアウトしたい人ができるような環境づくりが必要です。自分を明らかにして受け入れられることは、その子どもが自信と尊厳を持って将来を歩む第一歩となるでしょう。

起こりうる問題

セクシュアルマイノリティに対する理解が十分ではない状況で、当事者であることが明らかになった場合、誤解や偏見によっていじめられたり、人間関係が破綻したりする可能性があり、精神的に大きな傷を受けることが考えられます。さらにアウティングされる危険にもさらされます。必要であれば積極的に保護し、精神的ケアに努めてください。またカミングアウトした後や、アウティングされた後には、いじめ等の問題が起こっていないか、注意深い観察が必要です。並行して周囲の理解を進めるなどの対策が重要でしょう。

アウティングについては、その結果起こりうる深刻な状況を認識して下さい。相談や対策のためであっても、本人の了解なく他の教師や家族に伝えることは、セクシュアルマイノリティの子どもを厳しい状況に立たせる危険性があり、注意が必要です。

アウティングする子どもに対しては、その深刻さと問題性を認識し、理解するよう指導してください。また、学校全体でもアウティングの防止に取り組みましょう。

カミングアウトを受けたら ——共感と受容の態度で

リスクがあるにもかかわらずカミングアウトをするのは勇気のいることです。自分のことを知ってほしい、理解してほしいという思いと、信頼して打ち明けた気持ちを受けとめてください。まずは言ってくれたこと自体を尊重し、否定せずに本人の気持ちを傾聴しましょう。セクシュアルマイノリティは異常ではないこと、ひとりではないことを伝えて励ますと共に、セクシュアルマイノリティへの理解を言葉や姿勢で示してください。

もしかすると、何らかの問題を解決するためにカミングアウトしたかもしれません。困っていることはないか、不安や心配事は何か、じっくり相談にのりましょう。

子ども同士のカミングアウトもあります。カミングアウトを受けた子どもに対しては、受けた側の混乱や精神的な負担に対する配慮が必要です。そしてカミングアウトした友人を理解できるよう、援助してください。

子どもがカミングアウトを考えていたら

カミングアウトの結果を左右するのは、日頃の人間関係と知識です。日頃から良好な関係・クラスづくり、多様な性に関する教育や、教職員の言動を意識しておくことが重要です。また、カミングアウトのタイミング、方法、準備や心構えなど、本人と十分相談をしましょう。あくまでも本人の意志を尊重し、強制や誘導がないよう注意が必要です。「カミングアウトしない」という選択があることも、併せて伝えておきましょう。

カミングアウトは目標ではなく、あくまでもスタートであり、通過点ともいえます。カミングアウトした後も継続して、本人や受けた側に対する支援が必要です。

まずは自分の周囲から

カミングアウトは子ども同士・学校内とは限りません。同僚の先生、家族、友人のひとりが、あなたにカミングアウトをするかもしれません。カミングアウトを受けた自分は、それをどう受けとめ、対応できるでしょうか？どんな言葉をかけることができるでしょうか？

自分自身が心の準備をしておくことや、具体的な対応を考えてみること、職場や家庭で相談や話がしやすい雰囲気を意識しておくことが、環境を変えていく力になるでしょう。

数字から見るセクシュアルマイノリティの現状～心身の健康を阻害する背景～

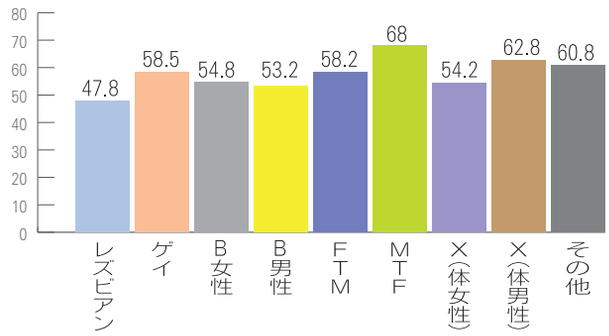
「LGBT 当事者の意識調査　REACH Online 2016 for Sexual Minorities」

○いじめ被害経験

小・中・高校の学校生活において、全体の約 6 割（58.2%）にいじめ被害の経験がありました。経験者のうち、「ホモ・おかま・おとこおんな」などの言葉によるいじめ被害は 63.8%、服を脱がされるなど身体的いじめ被害は 18.3% でした。

また、不登校の経験者は 21.1%、自傷行為の経験者は 10.5%でした。

学校 (小中高) におけるいじめ被害経験　n=15,064

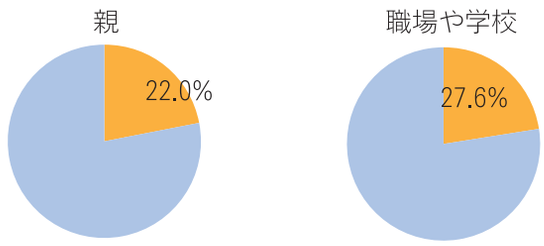


○カミングアウトの状況

- 親へのカミングアウトは 22%
- 職場や学校でのカミングアウトは 27.6%
- 都市部の方が、カミングアウト率が高い傾向

身近な人、職場や学校など、生活圏でのカミングアウトができない状況を考えると、日常のストレスや孤独、相談などの困難が伺えます。

カミングアウト率　15,064 人中



○職場・学校の環境

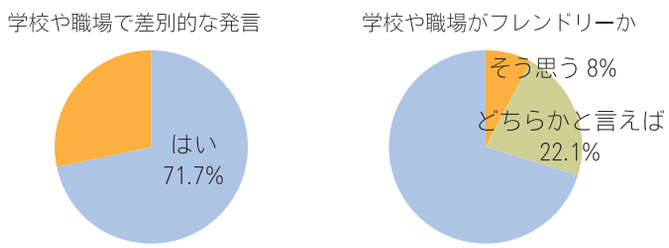
- 7 割以上が「差別的な発言」を経験

地域差はあまりなく、いずれの地域でも高い。

- ＬＧＢＴフレンドリーと感じるのは 3 割

カミングアウトできない背景、日常的に否定的な発言にさらされている現状が伺えます。

学校・職場の環境　15,064 人中



カミングアウト率が低いにもかかわらず、全体的にいじめ被害の経験は高率です。おそらく、何者であるかということが明確でないままに、異性が好きではない、性別規範（男らしさ、女らしさ）から逸脱するなど、人とは異なって見えることがいじめの原因となっている可能性があります。学齢期の支援においては、L／G／B／T かどうか、何者かということにとらわれず、いわゆる「男・女らしくない」など、性別表現が非典型的に見える子どもたちに対する観察や見守りが大切でしょう。

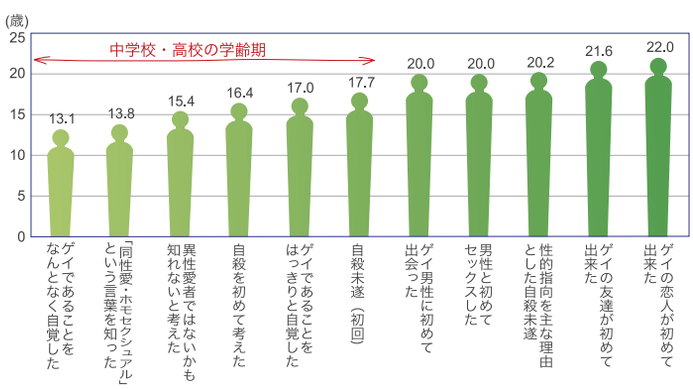
ゲイ・バイセクシュアル男性

○思春期におけるライフイベント平均年齢

思春期の頃自覚し始めた当事者が、自覚が深まるに従って自尊感情が低下していく経過、実際にゲイ男性に出会うまでの 10 代の孤独な状況が伺えます。

自覚以降の支援も重要ですが、当事者が自覚する前・早い時期から「同性を好きな子もいる」「好きもいろいろ」など、肯定的な情報を知ることができる環境・教育が必要です。

❸ 思春期におけるライフイベント平均年齢　（有効回答数1,025人）

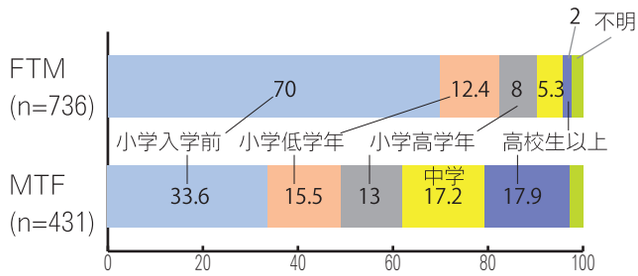


性同一性障害～性別違和感をもつ人の場合

○性別違和感を自覚し始めた時期

岡山大学病院ジェンダークリニックを受診した性同一性障害当事者 1167 名の多くが、物心がついた頃には違和感を自覚しています。約 9 割が中学生までに違和感を自覚、特に FTM 当事者の 7 割が 小学校入学時すでに違和感を持っていました。

低学年・早期からの対応が大切だと考えられます。

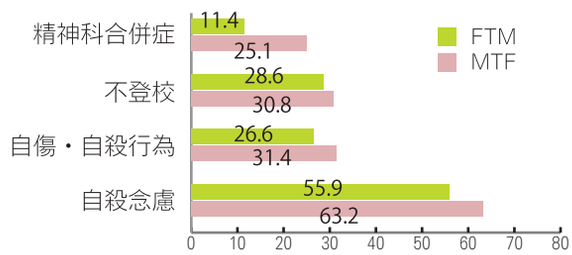


○性同一性障害における種々の問題

受診者の中には、自殺念慮、自傷・自殺未遂、不登校の経験が高率で、対人恐怖などの神経症やうつなどの合併症をもつ人もありました。人間関係や社会制度との摩擦により 2 次的に生じたものと考えられます。

思春期には第二次性徴を迎え身体が望まない性の特徴を表してくることによる違和感の増強、制服、恋愛の問題など要因が重なる時期で注意が必要です。

性同一性障害における種々の問題



自分が何者かを知るための知識・情報が得られないまま、むしろ否定情報にさらされ、周囲の無理解や身体の変化に対面していく子どもたちが、大きな苦痛や孤立感を抱えていることは想像にかたくありません。自尊感情の低下や違和感の増強などがどのような要因によってひきおこされるのか、心身の状態に対する観察や環境への配慮が必要でしょう。まずは、周囲の大人が正しい知識を持つことで、性別について相談できるような雰囲気作りが第一歩です。すぐに専門家・当事者団体などに丸投げしてしまうのではなく、生活圏の大人が不安に耳を傾け、話せる場・居場所となること、一緒に考える姿勢が必要です。

そのうえで自殺念慮や精神的苦痛が強いケース、身体に対する性別違和感が強いケース（自傷行為など）では、医療的観察・支援が必要な場合もあり、保護者や学校外・保健・医療機関との連携が重要となってきます。

また多くの当事者が周囲にはカミングアウトできない状況も明らかになっています。学校のなかで、いじめ、不登校などの問題を抱える子どもたちの中に、セクシュアルマイノリティの当事者がいる可能性、言わないだけで教室の中に当事者がいるかもしれないという視点が大切でしょう。

健康は人権であり、子どもたちの健康を守ることは大人の責任でもあります。心身の健康が阻害されている現状を認識するとともに、健康が阻害されている背景＝課題を解決していくことが求められます。

【参考】
□日高庸晴「LGBT 当事者の意識調査　REACH Online 2016 for Sexual Minorities」
※http://health-issue.jp　（他にもダウンロード資料多数あり）

□日高庸晴他、厚生労働省エイズ対策研究推進事業「ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート」
http://www.j-msm.com/report/report01/
2005 年実施のゲイ男性対象のインターネット調査報告
http://www.j-msm.com/report/report02/（有効回答数 5,731 人）

□リーフレット「学校の中の『性別違和感『』を持つ子ども～性同一性障害の生徒に向き合う」
岡山大学ジェンダークリニック／岡山大学大学院保健学研究科／ GID 学会理事長　中塚幹也
JSPS 日本学術振興会　科学研究費助成事業 23651263　挑戦的萌芽研究「学校における性同一性障害の子どもへの支援方法の確立に向けて」

学校生活の中での支援

◇セクシュアルマイノリティはどう思っているか：生活の中の葛藤や困りごと

体の性別に合わせる苦痛や苦労

- トイレが困った
- ランドセルの色、制服、水着、とにかく男女分けが嫌だった
- 修学旅行の風呂は考えられない
- 性別欄を見て、いつも本人かどうか疑われる
- 先生に、もっと男らしくしなさいと言われた
- 望みの性別で働けない事が辛く、なかなか社会人に踏み出せなかった
- 戸籍の性別変更条件が厳しすぎ！

異性愛者前提の苦痛や不便

- 結婚は？彼氏は？と聞かれるストレス
- 同性パートナーが家族扱いされない
- 恋愛話がすごくしんどかった！
- 異性愛者のフリをする緊張感。周囲とは距離をとっている
- 生活上の習慣や制度から「いないこと」になっている自分

自己否定や葛藤、将来への不安

- 同性が好きだと気づいてショック！死んじゃいたい！
- 誰にも言えない孤独
- 何かあっても相談できない
- ずっと嘘をついてる気分
- 心の性別で生活できず、魂が抜けた状態の毎日
- 親に幸せを見せてあげられない罪悪感
- 差別に怒れない、自分でも自分が気持ち悪いから…
- 人がテレビを見て「気持ち悪い」と言っているのに傷つく
- 学校でオカマといじめられて子どもが引きこもりに（母）
- もっと早く情報があれば悩まずにすんだのに！
- 将来に全く希望がない
- 家族には負担をかけそうで言えない
- 地元＝自分を偽って生活するところ
- 子供がほしいが自分に家族が持てるのか？
- ホモ、おかま、気持ち悪いと言われた

多様な性のありようを学ぶ機会がない子どもたち自身も、「男か女のどちらか」で「異性を好きになる」ことが、あたり前で正常だと思っています。人とは違う自分に気づいた子は、自分がおかしいのではないかと悩み、自分を偽って生活することでストレスを抱えます。

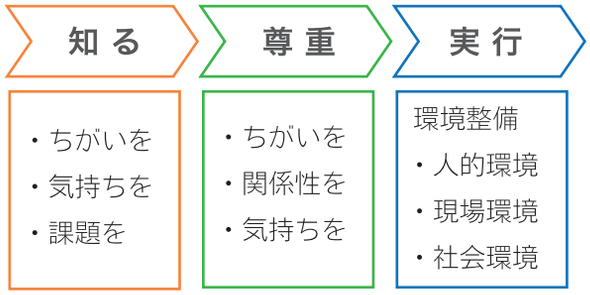
「異性を好きになることは自然なこと」「どんな家庭を築きたい？」「どんな男の子／女の子が好き？」といった異性愛前提・同性愛を否定するような授業内容や発言に傷つく子や、身体の性別で扱われることに苦痛を感じる子もいます。また、どんなに悩んでいても、自分が理解されないと感じれば、教職員に相談することはないでしょう。言えない子どもたちがいることも念頭に置き、想像力を働かせて、真摯で開かれた心と姿勢で取り組んでいきましょう。

〈当事者が直面する課題〉
① 自己否定、自尊感情の低下
② 自分らしく暮らせない（さまざまな経験の不足）
③ 将来への希望がない
④ 孤立・孤独（アクセス困難）
⑤ 偏見、いじめ、暴力被害
⑥ 生活上の不便や不利益

◎参考：「わたしたちはここにいる～性的マイノリティの声：奈良県版」

対応のポイント～教育保障、機会保障の視点で～

・どの教室にもマイノリティがいる前提で。
・わからなくても否定しない、ちがいをそのまま尊重。
・当事者も自覚は不十分、決めつけないこと。
・どうしてほしいかは人によってちがう。
（自己決定することを支援する）
・「何者か？」より、何に困っているかに焦点をあて、困りごとを解決する姿勢で。
・何者かにかかわらず、安心安全な学校環境に。



情報がなく、否定的な言動・環境の中で過ごしているマイノリティの子どもたちにとって大切なことは、まずは自分を承認される体験です。

学校は、子どもたちが生きていくための試行錯誤や人間関係を経験していく場でもあります。子どもたちがどのような自分を自覚したとしても、自分自身を肯定的に受けとめ、自分らしく生きていくために、学校ですべきこと、できることがたくさんあります。

今ある否定的な情報・環境については改善し、足りないものは補い、自尊感情を育み、生きるために必要な経験ができる教育環境が必要です。

いじめに対しては差別事象と認識し、対応しましょう。「おかま」「ホモ」「レズ」「オトコオンナ」「キモイ」などの言葉を使わないよう指導し、なぜいけないのか背景を考えさせるとともに、多様な性のありようを考える教育機会と捉えましょう。

対応案

（1）自尊感情を育む情報発信
・多様な性、性的マイノリティに肯定的な言動を
・異性愛を前提にしない
・教室、図書室、保健室などに本や資料をおく、ポスターを貼る
・多様な性に関する授業のとりくみ
・一般授業にも、多様な性・性的マイノリティ視点
・「幸せ観」「家族観」を広げておこう

（2）研修・啓発
・教職員対象の校内研修、校外研修への参加
・保護者を含む研修機会（講演会など）
・保健便り、学級通信などの活用
（人権コラム、本の紹介など）

（3）環境整備
・制服、水着、体操服の自由化、選択肢の工夫
→選択制にする、ラッシュガードの導入
・性別に関係なく利用できる空間：多目的トイレ
・男女別→性別で分けない工夫：名簿、グループ
・相談しやすい雰囲気・空間づくり
・セクシュアルマイノリティに対応できるスクールカウンセラーの配置
・学生証、受験の願書、入学手続き等の書類の性別欄の検討
・クラブ活動などの支援

（4）個別に相談、要望があれば
・まずは、話をじっくり聞き、一緒に考える姿勢で
・精神的支援、見守り
・人間関係の調整・改善の支援、差別偏見の改善
・できること、できないこと、時間が必要なことなど、整理して、その理由を伝える
・必要に応じて、専門家、当事者団体などとの連携

◎性別違和のある子どもたちの場合
希望の性別での扱いを検討するとともに、個別に配慮対応する。
・名前：自称を認める
・服装：制服、体操服、水着・上靴などの変更
・男女分け：ロッカー、靴箱、班分け、呼び方の変更
・健康診断、身体測定：個室確保、順番の工夫
・更衣、宿泊部屋、入浴：個別に確保、順番工夫
・水泳はレポートへの振替など検討
・制服、書類の性別記載の変更
・トイレ：多目的トイレ、職員トイレや別棟の使用

※違和感や苦痛、必要なことは人それぞれなので、本人とよく相談すること
※見える当事者は氷山の一角。要望をきっかけに、環境を見直し改善していく機会、教育研修機会とする。

家族への支援

●ポイント

・子どもがセクシュアルマイノリティであっても、家族はそうではないことが多い。家族が、子どものありようを理解できるとは限らない。
・子どもは家族（特に親）には自分の性に関する話をしにくいと思っている。
・家族に対して、教職員から勝手に子どもが当事者であることを伝えない。どうしてほしいかは、あくまでも子どもと相談する。
・子どもの親・兄弟姉妹ら家族がセクシュアルマイノリティ当事者である場合がある。
・家族も多様であるという視点が大切。
・家族への援助も重要な課題。

家族の気持ち

もし、わが子や家族がセクシュアルマイノリティだと知ったなら、まずは驚き、ショックを受ける人も多いでしょう。怒りや悲しみを感じ、混乱する人もいるかもしれません。そして「自分のせいではないか」「育て方が悪かったのではないか」「友達や環境のせいだろうか」「病気ではないか」「治るのだろうか」と悩んだり、自分や子どもを責めたりする人もいます。

また、子どもがセクシュアルマイノリティであることで、子ども自身や、家族である自分が不幸なのだと思い、苦しむかもしれません。教職員としては、まず家族の気持ち、不安やショックを受けとめ、傾聴する姿勢をもつことが大切です。

◆ 親から子どもへ――言わないでほしい言葉
・自分の育て方が悪かった。
・病院へ行ったら？
・いつか治る。
・一時の気の迷い。
・周りにわかったら恥ずかしい。

家族に対する子どもの気持ち

当事者の子どもたちの多くは、本当は身近な人に自分の気持ちを知ってほしい、理解されたいと思っています。しかし、理解してもらえないのではないか、否定されるかもしれないという不安や恐れのため、身近な人ほど言いにくいと思い、隠している子どもも多いようです。自分がセクシュアルマイノリティであることが家族を悲しませるのではないかと心配する子どももいます。

子どもが幸せかどうかは、本人の問題ではなく、周囲の状況によるところが大きいでしょう。子どもが自分の性のありようにかかわらず、まずは「学びの場」を確保できるよう、そしてのびやかに育つことができるよう、学校・家庭・地域が協力し環境を整えていくことが大切です。

家族への対応

懇談会などで保護者と話をする機会には、セクシュアルマイノリティを受け入れられるような土台づくりをすることが大切です。家族から教職員に相談したいと思うことがあるかもしれません。日頃から、家族に対しても多様な性に関する情報・メッセージを発信しておけば、「この先生になら言える」という相談しやすい雰囲気や信頼関係を作りやすくなるのではないでしょうか。

・保健便り、学級通信などの利用
・校内で講演会・研修などを企画・開催
・図書や映画などの紹介

1）家族に伝えておきたいこと
・子どもがセクシュアルマイノリティであっても、あなたの子どもであることにかわりはない。まずは、受けとめてあげてほしい。
・子どもがセクシュアルマイノリティであることは「異常なこと」ではない。「すぐに病院へ」と思わず、ゆっくり話を聞いてほしい。
・原因を追求することや、育て方が悪かったなどと自分を責める必要はない。
・あなたの子どもだけではなく、見えないだけで当事者はたくさんいる。
・セクシュアルマイノリティであることが「不幸」なのではない。また、幸せかどうかは子ども自身が決めることで、周りが決めつけないでほしい。
・子ども自身も苦しんでいることに思いを寄せ、子どもがありのまま、自分らしく生きていくことを見守り、応援してあげてほしい。

2）必要に応じて情報を提供する
・家族の立場で話をできる場、聞いてもらえる場、相談できる場もある。
・本などの紹介：『カミングアウトレターズ』

（資料参照）

将来に向けて

多くのセクシュアルマイノリティの当事者は、日常生活を送っている身近なモデルが少ないために、自分の将来に不安を持ちがちです。テレビなどで見るセクシュアルマイノリティが、芸能人やサービス業従事者など、情報が限られているためです。自分がありたい姿での生活をイメージできないことは、ありのままの自分を受け入れることを困難にし、生き方の選択肢をせばめます。

また、周囲にカミングアウトすると差別や拒絶を受けるのではないかと思い、孤立しがちです。

まずは、一人ひとりが自分らしく生きることができるような進路支援が大切です。さらに、セクシュアルマイノリティであっても道は閉ざされていない、未来は開かれている、と希望のある進路支援をしてください。

進路支援について

当事者には、「就職に不利になるのでは」「家族をもてないのでは？」など、「セクシュアルマイノリティだから幸せになれないのでは」というような不安を持つ人が少なくありません。

将来について一緒に考えようとしてくれる人がいることは、当事者を力づけ、希望を与えることになります。そのような人がいることによって、困難にぶつかったとしても生きることに希望を持ち続けることができるでしょう。

教職員が力づける人になるためには、日常の中でセクシュアルマイノリティを否定しない姿勢でいることです。授業や普段の会話のなかで、「人には男か女のどちらかしかない」「異性を愛することがあたりまえ」という前提で話をしている人に対しては、子どもたちは自分のことを打ち明けにくいと考えるでしょう。

マイノリティに限らず生きていくためには、技術や資格、人間関係が役立つことがあります。進路支援にあたっては、自分らしく生きていけるよう、生活力やあきらめない力、支え合いながら生きる力をつけておくことが、将来の選択肢を広げることになるでしょう。困難にぶつかったときのストレスマネージメントや相談の方法、経済面での自立の方法などにも配慮してください。子どもたちのなかには、セクシュアルマイノリティの当事者がいると想定し、その子どもに合った、具体的な進路支援をしていきましょう。

専門職、当事者団体との連携

状態・状況に応じて、医療・保健・福祉・カウンセラー等の専門職や、当事者団体との連携を検討しましょう。医療判断が必要なとき、状況を整理し、選択肢を広げることに役にたつかもしれません。

当事者であると告げられている場合

セクシュアルマイノリティだからと進路をせばめることなく、多様な選択肢があるという前提で進路支援を進めましょう。進路選択で不安を感じているとき、それがセクシュアルマイノリティだから遭遇する困難なのか、そうでないのか、整理して話を聞くことが大切です。また、困ったことが起きたとき、誰かに相談し、支援を受けることができることも伝えておきましょう。できれば、その支援者の一人が自分であることも。

性別に違和感があるからといって、トランスジェンダーであるとは限りません。まずは、子どもの気持ちに寄り沿い、必ずしも対応を急がないようにしてください。トランスジェンダーの場合、手術やホルモン療法による性別移行を希望している人もいますが、そうでないこともあります。たとえば、体はそのままで、心の性で生きていきたい人や、自分の性別をはっきりさせないままでよい人などさまざまです。また、手術の希望があっても費用などの問題でなかなか叶わないこともあります。

今の社会では、女か男の枠にはめ込んでしまいがちですが、性のありようは他人が決めるものではありません。性別移行も含め、進学、就職など将来どのように生活していきたいか、本人が具体的に考えられるよう、手助けをしてください。

教職員として

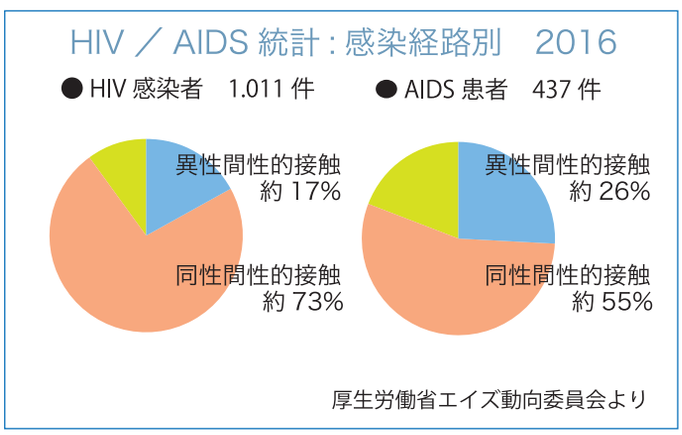
教職員には、セクシュアルマイノリティの当事者が、自分らしく生きることができる社会を作っていく役割もあります。また、子どもの教育に関わるいろいろな場面で、セクシュアルマイノリティの当事者がいることを想定した取り組みは、自分のことを明らかにできないでいる当事者が、自分を肯定するきっかけや将来への希望につながるかもしれません。また、支援者を増やすことにもなるでしょう。

セクシュアルマイノリティの子どもたちと性行為感染症

現　状

現在の性教育では、性行為感染症の現実と予防について、必要な内容が教えられていないのが現状です。たとえば、性行為には触れない、男女（異性）間の性行為や避妊教育にとどまる、HIV 感染症に限定した予防など、現場によってさまざまです。

下の表からわかるように、異性間であれ、同性間であれ、予防しない性行為には感染のリスクがあることを認識し、教育していく必要があります。



セクシュアルマイノリティの子どもにとって、性行為は必ずしも「生殖」を意味しません。「異性間」や「妊娠・出産」を前提とする性教育では、自分にとって必要な情報が得られない上、自分の存在が否定・疎外されていると感じる子どもが多くいます。パートナーが異性かどうかにかかわらず、誰もが人を愛する感情や性的欲求を否定されないよう、パートナーとの人間関係や愛情を豊かに育てることができるよう、援助したいものです。

教育のポイント

- 異性間を前提とした性教育をしない。
- 同性間＝同性愛者とは限らない。
- 情報や予防方法は具体的に。
- タブー、善悪、モラルではなく、科学的に考えよう（ウイルスは人を選ばない）
- HIV に限定するのでなく、STD/I（性感染症）全般の知識が必要。
- 「同性愛が感染の原因である」というような誤解や偏見を与えないよう注意。
- 生き方、人生、健康を考える一環として、性行為に関する（妊娠・性感染症を含む）情報やスキルを身につける教育が望まれる。

実践・実行力を育てる

情報や知識があっても実際に予防手段を実行できるとは限りません。何が実行することを阻害しているのか、その背景や根本的な原因を考え、アプローチする必要があるでしょう。

- 自尊感情が低い人は感染予防を実行しにくいという指摘がある。→マイノリティの子どもたちが自分を大切に思える環境が大切
- パートナーとの力関係を考える（年齢、性別、職業、立場、愛の有無などが力関係になる。）
  →話ができる関係作りとスキル
- パートナーとのコミュニケーション力をつける
  →「俺を信用しないのか」「コンドームをつけると気持ちよくない」「妊娠しないのだから」等にどう答えるか？

感染不安の相談について

- プライバシー保護と、性や自分のセクシュアリティについて話しやすい環境づくり。
- 感染不安・動揺、その原因や背景・自分のセクシュアリティについての罪悪感や理解されないのではないかという不安を受けとめる。
- 一緒に考える姿勢で。
- 受容的共感や理解をしめし、孤立させない。
- 正確な情報を適切に提供する
- 必要に応じて、保護者、カウンセラー、医療・保健機関等と連携し、援助につなぐ。
- 相談機会は、性教育、予防教育の機会でもある。
- 感染症および感染症患者への偏見を助長しないよう、言動に留意する。

性行為感染症予防の基本

＊病原体 (ウイルス・菌・微生物) が粘膜や傷口と接触すること、たとえば膣性交、アナルセックス、オーラルセックス等で感染の可能性が発生する。

＊予防の基本は感染経路を遮断すること。

＊予防には、コンドーム、デンタルダム、手袋を正しく使用することは有効である。

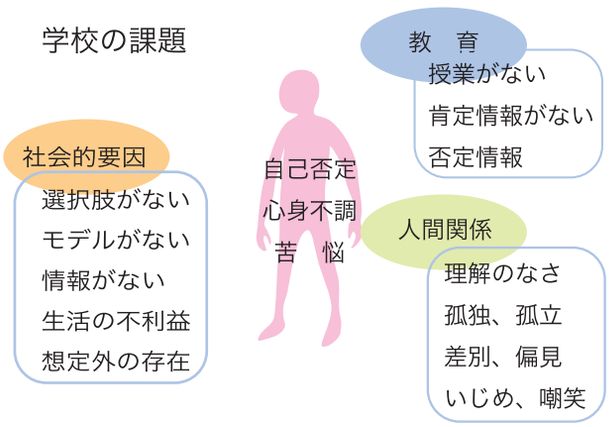
＊セックスで感染する病気はたくさんある

・梅毒　・クラミジア　・淋病　・B 型肝炎
・C 型肝炎　・尖圭コンジローマ　・性器ヘルペス
・毛じらみ　・カンジダ　・HIV 感染症

子どもたちに情報と考える機会を

授業の意義

1. 性の多様性に関する情報を肯定的に届ける
　→自尊感情を育てる。偏見の改善。
　　自分の性について考える（自己受容）。
　　性的マイノリティの存在を肯定的に知る。
2. ちがいを尊重する姿勢を学ぶ
　→人権尊重・共生の社会づくり。
3. 授業の有無にかかわらず、当事者はいる
＊プライバシーや当事者の存在に配慮。
＊差別的発言に対しては教育機会と捉えましょう。



学校は社会の縮図です。社会がそうであるように、学校の日常も「男か女のどちらか」で「異性が好きになること」が、あたりまえの世界となっています。当事者も含め、子どもたちにもすでに、同性を好きになることや異性の服装をすることが、「おかしなこと」「気持ち悪い」と思ってしまう意識や態度、偏見が育ってしまっています。

性の多様性について学ぶ機会がなく、多様な視点を持たない環境や言動、ちがいを否定するような風潮の中で、周囲の子どもたちとは違う自分に気づいた子が、自分自身を肯定的に受けとめることは難しいのが現状です。

誰にも相談できず、あるいはいじめや暴力の対象となったり、通学が困難となったり、孤立していく子もいます。

情報を得る事、自分らしさを尊重される事、教育を受ける事は子どもたちの権利です。すべての年代を通して、多様な存在やちがいを尊重できるような関係づくりと、自尊感情を育む教育環境が求められます。

自分や他者の性について「考える」機会を通して、誰もが「自分だけの大切な性」を生きていることを知り、マイノリティかどうかにかかわらず自分や他者の性をありのまま尊重できる意識を育てたいものです。同時に、「あたりまえ」をふりかえり、思い込みや偏見に気づく機会、誰かの視点で自分や社会を考える機会となればと思います。

結果、当事者に対して必要な情報やマイノリティの存在を伝えると同時に、いじめや不登校、自殺念慮などを減らすことにもつながります。学校が変わっていくことは、その延長にある社会の生きづらさが解決される道、人権が尊重され、誰もが自分らしく生きられる共生社会につながることでしょう。

「女装」と性別表現について

「女性の服装をする人」には、いろいろな人がいますが、必ずしも特定の性別、性的指向、性自認の人とは限りません。理由や目的もさまざまです。しかし、女装・異性装も含め、その人なりの性別表現が尊重されることが大切でしょう。

学校の中では、生徒や先生が、笑いをとるために「女装する」という場面が見られます。一方大学祭などで開催されてきた女装コンテストや女装バーなどが、あいついで中止されるようになりました。

「女装する」こと自体は悪いこと、おかしなことではありません。一方的に行為を禁止するのでなく、考え学ぶ機会としたいものです。

大切なことは、たとえ悪気がなくても、そこに誰かに対する蔑視や偏見・差別がないか、誰かを傷つけ、貶める結果となっていないか、ということではないでしょうか。多くの性的マイノリティ当事者が、面白おかしく女装したり、異性装を笑いものにしたりする場面に傷ついた経験を持っています。

その社会・文化において性別の規範を逸脱すること、たとえば「男らしくない」「女らしくない」ことは、いじめや差別の対象となることが多々あります。たとえ自分の価値観や理解とは異なっていても、性別表現を含め、その人らしさ・自分らしさを尊重する姿勢を育てることが大切でしょう。

＊性別、性自認、性的指向に対する差別と同様、性別表現に関連した差別も人権侵害です。
＊どのような性のありよう（性自認、性的指向、性別表現を含め）で生きていきたいかということは、尊重されるべき人権です。

ある青年の手記

一体、自分がゲイ（男性同性愛者）だと認識したのはいつのことだろう？
中学生の頃、こんなことがあった。教室外での授業か、休み時間の後だったのか、教室に帰ると黒板に名指しで“オカマ”と書かれていた。“オカマ”という文字の前には“女みたいなしゃべり方、気持ち悪い”そう書かれていたのだった。

高校時代には、自分が周りと違うということをはっきりと知らされた。友人同士では異性の話題で盛り上がる。居心地の悪さを感じながら、当時人気のあった女性アイドルの名前を挙げ、適当に話を合わせていたが、会話に積極的でないことはすぐに見透かされる。「おまえ、女嫌いか？」「オカマちゃう？」「そう言えばおまえ、女っぽい」

たまたま見た深夜テレビでは「性倒錯」というテーマで、同性を愛する男たちが“異常な世界”を生きる者として描かれていた。「性倒錯」？　辞書や「家庭の医学」には、性倒錯＝同性愛など、“異常性欲”“変態性欲”と書かれていた。「自分は変態？　異常なんや」ショックだった。

その頃（今も？）テレビに現れる“オカマキャラ”は笑いの対象だった。彼らが現れるたび母親が発する「気持ち悪い」の一言に、いちいち傷ついた。親には決して言えないと思った。
バレたら、笑われる、気味悪がられる、「異常・変態」とののしられるのでは…誰にも知られてはいけない。隠さなければならない、“男らしく”振舞わなければならない。自分の身のこなしを意識し、異性愛者を装い、性的欲求も抑圧し、人に悟られないよう自分を偽る術を身につけていった。

就職し、一人暮らしを始めた僕は、初めてゲイ自身が書いた本を手にした。
20 代後半のある日、初めて、自分以外のゲイと真面目に話をする機会を得た。
本を読み漁り、集会などにも出向いていった。

ようやく自分で自分を受け容れられるようになって、何人かのゲイの友人ができた。彼らの中にも今なお自己肯定できないという人がいる。男性優位社会の中で、黙ってさえいれば、男として“優位な立場”で生きていくことができると考える人もいる。自らを偽り、そしてもう一人を偽り、“結婚”した人もいる。結婚した人は「世間の目が気になる」「仕事の上で信用されたい」「親を安心させたい」と思っているようだ。本人も相手もそれで幸せになれるのだろうか。だけど、結婚しなければと悩む友人たちを見ると戸惑ってしまう。

実際僕も、周囲の人には「女を愛する男」だと思われていて、いろいろな人に、「彼女は？」「結婚は？」「なぜ結婚しないの？」と声をかけられる。「いい人紹介するよ」「一人っ子なんだから両親が安心できないよ」とおせっかいも焼いていただく。「僕はゲイですから結婚はしないんです」と言えればいいのだが、僕を含めた多くの人が、「ちょっと縁がないので」「今は 1 人でいたいものですから」とか、「さあねえ」とごまかしている。

僕たちは学校で、同性愛者について学ぶ機会がなかった。正確な知識、同性を好きになる人が存在すること、自分を肯定的にとらえる情報を知ることができなかった。学校では相談できず、親にも言えず、友達にも言えず、長い間一人で悩んできた。これから、自分が同性愛者かもしれないと認識した子どもは、そのとき、誰に相談すればいいのだろう。

この社会にもいろんな人が生きている。誰もが自分とは違う。当たり前のことだがみんな、自分と違った他者と共に生きている。同性愛者に出会ったことがないと思っている皆さん、僕たちはここにいます。
「誰もが自分らしく生きられる社会」
ほんの少し、“想像力”を働かせてみることが、そこに一歩近づくのだと、僕は思う。

資料②

書籍・資料　等

全　般

■学校・病院で必ず役立つ　LGBT サポートブック
はたさちこ・藤井ひろみ・桂木祥子編著、保育社
■にじ色の本棚 ―ＬＧＢＴブックガイド―
原ミナ汰・土肥いつき編著、三一書房
■同性愛・多様なセクシュアリティ　人権と共生を学ぶ授業
“人間と性”教育研究所＝編、子どもの未来社
■第 2 版　性と生をどう教えるか
尾藤りつ子・性と生を考える会編著、解放出版
■LGBTQ を知っていますか？　“みんなと違う”は“ヘン”じゃない　日高庸晴監著、星野慎二ほか著
■みんなのためのＬＧＢＴＩ人権宣言 - 人はうまれながらにして自由で平等
国連人権高等弁務官事務所著、山下梓訳、合同出版

個別テーマ

■「プロブレムＱ＆Ａ」シリーズ　緑風出版
・同性愛って何？～わかりあうことから共に生きるために
・性同一性障害って何？～一人一人の性のありようを大切にするために増補改訂版
・同性愛パートナーと生活読本　～同居・税金・保険から介護・死別・相続まで
・パートナーシップ・生活と制度　～結婚、事実婚、同性婚
・10 代からのセイファーセックス入門　［子も親も先生もこれだけは知っておこう］
■トランスジェンダーの仲間たち：虎井まさ衛著、青弓社
■変えていく勇気―「性同一性障害」の私から
上川あや著、岩波新書
■トランスジェンダー・フェミニズム
田中玲著、インパクト出版会
■カミングアウト～自分らしさをみつける旅
尾辻かな子著、講談社
■百合のリアル　：牧原朝子、星海社新書
■僕の彼氏はどこにいる　：石川大我著、講談社
■カミングアウトレターズ
～子どもと親、生徒と教師の往復書簡
ＲＹＯＪＩ＋砂川秀樹編、太郎次郎社エディタス
■性別に違和感がある子どもたち　トランスジェンダー・SOGI・性の多様性：康純編著、合同出版
■セクシュアル・マイノリティへの心理的支援　同性愛、性同一性障害を理解する：針間克己・平田俊明編著、岩崎学術出版社
■図解雑学ジェンダー：加藤秀一他著、ナツメ社

絵本・子ども向けなど

■タンタンタンゴはパパふたり
文：ジャスティン・リチャードソン＆ピーター・パーネル、絵：ヘンリー・コール、訳：尾辻かな子、前田和男、ポット出版
■じぶんをいきるためのるーる
IPPO（著・絵）、解放出版
■王さまと王さま　Koning & Koning
文・絵：リンダ・ハーン＆スターン・ナイランド、訳：アンドレア・ゲルマー、眞野豊、ポット出版、
■たまごちゃん、たびにでる
文：フランチェスカ・パルディ、絵：フランチェスコ・トゥーリオ・アルタン、訳：ドリアーノ・スリス、おおにしよしみ、イタリア会館出版部
■セクシュアルマイノリティってなに？
監修：日高庸晴、絵：中山成子、少年写真新聞社
■もっと知りたい！話したい！～セクシュアルマイノリティ ありのままのきみがいい
日高庸晴著、汐文社　＊全 3 巻、小学生から対象
■LGBT　なんでも聞いてみよう　中高生が知りたいホントのところ　QWRC＆徳永桂子著、子どもの未来社
■ぼくたちのリアル：戸森しるこ著、佐藤真紀子絵　講談社
■十一月のマーブル：戸森しるこ著、講談社

マンガ

■ＬＯＶＥ ＭＹ ＬＩＦＥ：やまじえびね、祥伝社
■オッパイをとったカレシ。
芹沢由紀子、講談社コミックスＫｉｓｓ
■放浪息子：志村貴子、ｴﾝﾀｰ･ﾌﾞﾚｲﾝ･ﾋﾞｰﾑｺﾐｯｸｽ
■きのう何食べた？　：よしながふみ、講談社
■ボーイ☆スカート：鳥野しの、祥伝社

その他

■新設 C チーム企画　http://rupan4th.sugoihp.com/
・DVD 高校生向け「もしも友だちが LGBT だったら？」
・DVD 小学生向け「いろんな性別～ LGBT に聞いてみよう！～」
・「ろう LGBT サポートブック」PDF でダウンロード可
■QWRC 制作冊子、ホームページからダウンロード可
・「ＬＧＢＴと医療・福祉」「ＬＧＢＴ便利帳」
■わたしたちはここにいる～性的マイノリティの声：奈良県版
制作：性と生を考える会（奈良）
■調査レポート「レスビアン、バイセクシュアル女性、トランスジェンダーの人々からみた暴力―性的指向・性別自認・性別表現を理由とした暴力の経験に関する 50 人の LBT へのインタビューから」
http://gayjapannews.com/news/lbtviolence.htm

安心・安全な職場

職場の環境整備を

生徒対応や授業・教室だけの問題ではありません。あたりまえのことですが、教職員や周辺関係者の中にもマイノリティ当事者がいるはずです。

日頃の態度や意識・偏見は、無意識に表面化するものです。セクシュアルマイノリティに理解のある職場か、当事者が働きやすい職場であるか、そこに差別や偏見がないか、「働く場」としての学校や人間関係を点検することも大切です。

◇こんな発言や態度に傷ついています

子どもたちへの指導や保護者への対応の中で、あるいは、職員室や懇親会などの日常の中で、労働組合やサークル等の活動の中で、「異性愛者」であることを前提として発せられる発言・結婚祝いなどの慣例やシステム、マイノリティにむけられる蔑視や偏見に満ちた言動が多々あります。

発する側には悪気がなく、無意識の場合もあるでしょう。女性問題に関心や理解がある人でも、男性に対しては無頓着な場合が少なくありません。

・男同士（女同士）は気持ち悪い
・「こっちか」（頬に手をあてる）
・結婚して一人前
・出産、育児をして一人前
・女装を笑いのネタに使う
・子どもができれば親の気持ちがわかる
・結婚は？　好みのタイプは？
・男はいいわね、家事をしなくてすむし・・

ひとはそれぞれ、たくさんの要素・立場で生きています。教職員というだけでなく、家族の一員として、誰かの父や母、兄弟姉妹、子どもとして、社会の一員、友人として、いつでもマイノリティ当事者と出会う可能性を考え、自分ならどう対応するか、どう声をかけることができるか、シミュレーションしておきたいものです。本当は気づかないだけで、すでに出会っているはずなのですから。

＊同僚が、性別を変更して働きたいと希望したら？
＊保護者から同性愛者の先生は困ると言われたら？
＊友人に彼女いないのと聞いたら「ゲイなんだよね」と言われたら？
＊娘（兄弟）が同性の恋人を連れて帰ってきたら？
＊同性の友人から好きだと言われたら？

社会の動向

◆人権教育・啓発に関する基本計画（法務省）

第４章　人権教育・啓発の推進方策
２　各人権課題に対する取組
（１３）その他
例えば、同性愛者への差別といった性的指向に係る問題や新たに生起する人権問題など　（H14 策定、H23 変更）

◆自殺総合対策大綱（厚生労働省）

第３　自殺を予防するための当面の重点施策
３（２）教職員に対する普及啓発等の実施
自殺念慮の割合等が高いことが指摘されている性的マイノリティについて、無理解や偏見等がその背景にある社会的要因の一つであると捉えて、教職員の理解を促進する。
（H24 見直し）

◆パワーハラスメント対策導入マニュアル第２版

・性的指向や性自認についての理解とパワーハラスメントについて
性的指向と性自認についての不理解を背景として、「人間関係からの切り離し」などのパワーハラスメントにつながることがあります。（略）職場で働く方が、性的指向や性自認について理解を増進することが重要です。

◆第４次男女共同参画基本計画（内閣府）

性的指向や性同一性障害を理由として困難な状況に置かれている場合や、障害があること、日本で生活する外国人であること、アイヌの人々であること、同和問題等に加え、女性であることで更に複合的に困難な状況に置かれている場合について、人権尊重の観点から人権教育・啓発等を進める。（H27）

◆改正男女雇用機会均等法（2017.1）

・職場におけるセクシュアルハラスメントには、同性に対するものも該当する。
・相手の性的指向又は性自認にかかわらず、該当することがありえる。「ホモ」「オカマ」「レズ」などを含む言動は、セクシュアルハラスメントの背景にもなり得る。

付録　素材集

＊あらゆる教科、日々の話題の中で、多様な性、セクシュアルマイノリティの存在に触れるきっかけに
＊ニュースや社会の動向に関心を持ち、みなさん独自の素材集を！

■レインボーフラッグ

1978 年、サンフランシスコのギルバート・ベイカーがデザイン。79 年サンフランシスコのゲイ・パレードで 6 色（赤橙黄緑青紫）の横断幕が使われ、以降同性愛者や性的少数者のプライドと運動の象徴として定着した。現在では、性の多様性を象徴するものとして、世界中で使われている。

■自然は多様～性を変える魚たち

□クマノミ
雄と雌のつがいで生活するが、
雌が死ぬと雄が雌に変わる

□トウゴロウイワシ
卵が育つ水の温度で雄・雌が決まる
冷たい水→雌、温かい水→雄

□キュウセン（ベラの 1 種）
若いうちは雌だが歳をとると雄になる

■自然界ではめずらしくない「同性愛」

「同性愛は自然に反する」などと言われるが、自然界は実に多様。

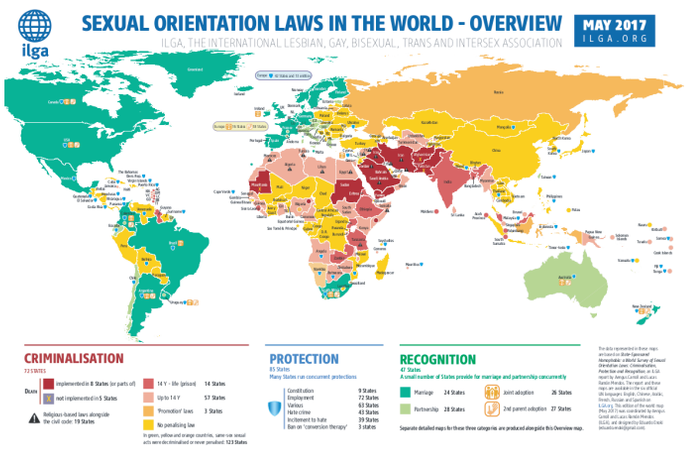
- 羊
- バンドウイルカ
- イワドリ
- ペンギン
- ライオン
- コアホウドリ
- ボノボ
- 水鳥～コクチョウなど
- キリン
- トンボ　　など

■世界のいろいろな性別

- トンガ：ファカレイティ、ファカ・タンガタ
- タヒチ：マフ、レレ
- サモア：ファファフィネ、ファファタマ
- アメリカやカナダの先住民：トゥー・スピリット（2 S）：
- サポテコ族（メキシコ）：ムシェ、マリマチャ
- インド・バングラデシュ：ヒジュラ

＊男か女とは限らない！
＊「性別」は 2 つとは限らない！

■同性愛者の人権の視点から見た世界（2017）



出典：ＩＬＧＡ（International Lesbian,Gay,Bisexual,Trans and Intersex Association：国際レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランス・インターセックス連盟）

■誰でも使いやすいトイレを考える

今あるトイレが使いにくいと思う人がたくさんいる。例えば見た目の性別が不明瞭な人、トランスジェンダーの一部の人たち、車いすの人、目の見えない人、立てない人、子ども連れの人…。
何が不便で、何が必要？
誰でも使いやすいトイレってどういうトイレ？

■ピンクトライアングル

ホロコーストで強制収用された者に装着させた識別胸章のうち、同性愛者を示すラベンダー・ピンクの逆三角形。１万から数十万の同性愛者が虐殺されたという説がある。現在は同性愛者の権利運動の象徴として、またラベンダー・ピンクがＬGBT のプライドや権利を象徴するシンボルとして使用されている。

■権利を知ろう

□世界人権宣言　第１条
すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

□国際社会権規約
□ジョグジャカルタ原則
□性と生殖に関する健康と権利

教職員のためのセクシュアルマイノリティサポートブック制作実行委員会

★奈良教職員組合
http://www1.ocn.ne.jp/~jtu-nara/
奈良市大安寺５－12－16
TEL 0742-64-1020・FAX 0742-64-1023
e-mail jtu-nara@deluxe.ocn.ne.jp

★性と生を考える会
http://say-to-say.com/
奈良市大安寺３丁目 9-14-202 （中田ひとみ　方）
TEL&FAX　0742-63-1482 e-mail
nakatah@kih.biglobe.ne.jp

◇サポートブックは上記ホームページからダウンロードできます。
◇この冊子は１冊 100 円（＋送料）でお分けしています。
ご希望の方は、上記「性と生を考える会」まで、FAX またはメールでご連絡ください。

発行
初版　2010 年 2 月
改訂版　2014 年 4 月
Ver.3　2015 年 8 月
Ver.3　修正版　2015 年 12 月
Ver.4　2018 年 1 月
デザイン／イトウミツル